

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02233

研究課題名（和文）死者への記憶に基づく宗教的情操の哲学的考察 死者倫理の基盤形成

研究課題名（英文）Philosophical study of religious emotions based on memories of the dead:
Founding the ethics for the dead

研究代表者

佐藤 啓介 (Sato, Keisuke)

上智大学・実践宗教学研究科・教授

研究者番号：30508528

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、国内外でコンセンサスが形成されていない死者倫理について、なぜ・どのように死者を尊重すべきなのかをめぐる諸分野の議論を整理し、死者倫理の規範の基礎を形成することを目指した。その結果、大別すると、死者に関する社会的記憶を維持することを重視する志向と、死者それ自身の尊厳ないし権利を尊重することを重視する志向が混在していることが明らかになった。また、それらの議論を「存在論」と「関係論」という枠組みを用いて理論的に整理できることが示され、この枠組みが死者倫理の理論的基盤たりうると明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題により、死者を倫理的に配慮すべき理由について、死者の社会的記憶を守ることが必要であるとする立場と、死者自身に尊厳ないし権利がありそれを尊重すべきであるという立場の二方面からの議論が必要であることが示された。特に、AIによって、生前にはなかった死者の言動を新たに生成することが可能になった時代において、そうした生成がなぜ、どの程度まで批判されるべきなのかという問題を考察するうえで、本研究が示した議論の枠組みは有効な理論的基盤として機能するはずである。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to formulate the basis of norms for an ethics of the dead, by organizing discussions in various fields on why and how the dead should be respected, as there is no consensus on the ethics of the dead in Japan and abroad. The results showed that, broadly speaking, there is a mixture of an orientation that emphasizes keeping social memories about the dead and an orientation that emphasizes respect for the dignity or rights of the dead themselves. Moreover, it is also shown that these orientations can be theoretically organized using the framework of "ontology" and "relationalism," and it is concluded that this framework can be the theoretical foundation for an ethics of the dead.

研究分野：宗教哲学

キーワード：宗教哲学 宗教学 死者倫理 応用倫理 死者AI 死者の記憶 死者の尊厳 死生学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、国内外の宗教研究において、記憶に関連する宗教現象の研究がますます重要性を増しており、とりわけ 3.11 以後の国内状況において、慰霊や鎮魂、葬送、追悼、語り継ぎなど、「死者」にかかわる記憶の継承行為が、ポスト世俗化時代における宗教的行為の重要な部分を占めるようになったことを背景に、開始された。一方においては、宗教研究において死者や先祖にかかわる宗教的行為・儀礼が広く研究され、他方においては、哲学研究・宗教哲学研究において、他者論的・倫理的な死者の記憶論が展開されていたが、研究代表者には、両者の分野の生産的対話が十分ではないように感じられた。なぜ人は死者を記憶しようとするのか。そもそも人は死者を忘れてはいけないのか。人が死者を弔い悼むとき、実際には何を求め、何をこなしているのか。個別の宗教的行為を根底から理解し、倫理的に判断するうえで重要であろうこれらの根本的な問いに対し、一定の視野を提供するのが宗教哲学の役割だと思われるが、その分野の研究は十分とはいえないと思われた。そうした問題意識を背景として、本研究課題は開始された。

2. 研究の目的

本研究は、慰霊、葬送、追悼などの個別の宗教的行為を動かしている動因を「宗教的情操」と規定し、その情操の構造を、人間存在の根本で働く記憶の役割に注目して宗教哲学的観点から明らかにすることを目的とした。そして、その情操に基づいて感じられる「死者の尊厳」が、どこまで一般的なものであり、どれほど倫理的に尊重されるべきかを考える「死者についての倫理」（これを「死者倫理」と呼ぶ）を論じるための理論的基盤を開拓することを最終目標とした。

以上の研究において、特に明らかにするのは以下の 4 つの課題であると設定した。

(1) 課題 : 記憶論による死者倫理の検討

記憶が物語られ、歴史叙述や公的制度へと継承されていく広範な過程を論じる記憶論を、死者についての記憶や宗教的行為を考える際の一つのモデルとして採用し、人間や社会にとっての「物語的記憶」の意義を明らかにすることを目指した。

(2) 課題 : 他者論による死者倫理の検討

現代の宗教哲学では、記憶を外部から強く誘発・強制する一つの要因として、他者の死や苦しみが注目されてきた。本研究は、レヴィナス以降顕著になったこうした議論を、なぜ人は他者の死に囚われるのかという点に注目して読み解き、死者を忘れまいとする傾向性の淵源を、死者の苦しみに対する罪責感情や悔恨、畏れ、崇敬などの念に求め、顕彰や追悼の対象だけには収まりきらない「手におえない他者としての死者」像の構築が現代宗教哲学の重要な課題であることを目指した。

(3) 課題 : 宗教研究を参照した、具体的記憶行為の検討

課題 1 の研究は依然、哲学的研究にとどまるため、宗教的情操が、慰霊や追悼行為にどう結びつき、実際にそこで人々が何を求めているのかは十分には解明されていない。そこで、思想研究では十分に注目されてこなかった、「物語」「空間・場所」「集団」「儀礼」「メディアム」など、宗教学的な研究が重視する宗教的行為の諸要素に注目し、人が宗教的情操に駆られてどのように宗教的記憶行為に至るのかを明確化しようと試みた。

(4) 課題 : 死者倫理の理論的基盤の構築

課題 2 の検討を通して、宗教的情操から人がどのように宗教的行為に至るかを示したうえで、最終的に、私たちが自らの幸福を追求しながらも、同時に「死者を尊重し、記憶する責任/忘却する自由」がどこまであるのかという倫理的問題を考える理論的基盤を確立することを目指した。

3. 研究の方法

研究の目的に記した課題 1 ~ 4 はいずれも文献研究によって研究した。

課題 1 では、現代の分析哲学の議論(死の害の哲学)を主として参照し、社会的記憶を維持することがなぜ倫理的に要請されるのかを明らかにする、という方法を採用した。

課題 2 では、現代の大陸哲学における他者論(レヴィナスなど)を主として参照し、死者の苦しみに対する敬意の根源として、「死者の尊厳」ないし「死者の権利」に対する感覚が広く私たちに見られることを明らかにする、という方法を採用した。そして、この課題 1 と課題 2 の議論の方法は、死者倫理の議論として対照的な構造をなす、という仮説を設定し、両者の特徴と差異、そしてそれぞれの限界や課題を明らかにすることで、両者を相補的に論じる必要性を示そうと

試みた。

課題 では、「人が宗教的情操に駆られてどのように宗教的記憶行為に至るのか」という具体的な事例として、2020年以降急速に現実的課題となったAI技術に着目し、死者をAIで再現・再生しようとする新技術に対する人々の応答や需要、反発に着目するという方法を採用した。これにより、課題 と で示した死者倫理の理論的枠組みが、具体的にどのように現実に展開されているかを示すとともに、上記の理論的枠組みの有用性を検証することを目指した。

課題 については、課題 ~ を通して示された死者倫理の枠組みを改めて整理し、「存在論的死者倫理」と「関係論的死者倫理」という枠組みによって位置づけ直すという方法を採用した。

4. 研究成果

本研究を通して、以下の成果を得ることができた（具体的には佐藤 2019, 佐藤 2022a, 佐藤 2022b, 佐藤ほか 2023 においてその成果を示した）。

（1）死者倫理の理論的基盤としての存在論と関係論

死者を配慮すべきとする多様な論の論拠を大別すると、その論拠は「存在論的」なものとして「関係論的」なものに区別できる。前者は、死者は実際に存在した（する）だから配慮すべきと主張し、後者は、死者は私（たち）に関係した（している）だから配慮すべきと主張する。前者は死者の存在性の欠如を、後者は死者と生者との（相互）関係の欠如を、何らかの形で埋める議論だと言える。また、存在論／関係論という区分とは異なるもう一つの軸として、「過去に生きていたが今は生きていない」死者に関する「時間性」の軸を設定することができる。具体的には、死者について過去性を重視する立場、現在性を重視する立場、普遍性（ないし無時間性）を重視する立場があり、存在論／関係論のそれぞれと組み合わせると6個の死者倫理に関する論拠がありうることを示された。そして、現実には、これらの論拠の複数に依拠して死者規範は語られているため、存在論・関係論各々の特徴を踏まえつつ、死者倫理は「複合的に」展開されるべきだという結論を導き出した。

（2）存在論における死者倫理

存在論と過去性を重視する立場には、死者が過去に存在し今はいない、ゆえに配慮すべきと考える。死者もまた過去の一部であり、過去を忘却・歪曲してはならないとする歴史学的忠実さを求めるような立場や、死者は過去に存在したが今は存在しないからこそ、今存在する存在者とは異なる他者性が認められ、それを尊重すべきとする立場がある。存在論と現在性を重視する立場は、死者は現在もある意味で存在している、ゆえに配慮すべきと考える。これは、死者は実在しないが、その名誉・評判・言説・記憶などは今も存在している、ゆえにその総体としての死者の社会的・象徴的存在は、生者のそれと同様に配慮の対象にすべきとする議論などがある。存在論と普遍性を重視する立場は、死者として生者と同様の存在者だ、ゆえに配慮すべきと考える議論であり、死者にも生者と同様に普遍的な尊厳や権利が認められるべきとする立場などが該当する。

（3）関係論における死者倫理

関係論と過去性を重視する立場は、死者は私たちに関係した、だから配慮すべきと考える。死者がいるから今の私たちが存在しているという「縁」と、それに対する感謝や恩を論拠とするような立場であり、親子関係や血縁から、広く先祖関係、さらには共同体や国家的関係など、多様な関係性を含み、近親関係から倫理的配慮を拡大していく。関係論と現在性を重視する立場は、死者は今も私たちに関係している、だから配慮すべきと考える。死者は今もなお（たとえ想像上であれ）継続する絆のかたちで私たちに心理的な影響を与えている、だから配慮の対象とする立場がここに含まれる。関係論と普遍性を重視する立場は、死者は私たちとの関係者だ、だから配慮すべきと考えるレヴィナスの立場などがここに含まれる。

（4）死者AIに即して考える

以上の理論的枠組みは、死者AI技術の倫理性を考察するうえでも有効であることが示された。死者AIの技術的争点は、生前に死者がしなかった新たな言動が生成される可能性にある。死者AIに対してはさまざまな反発の声を聴くことができるが、それらの批判や主張は、おおよそ三つのタイプに分類できることを示した。

1：死者AIは、ユーザーに対して心理的な害をおよぼす可能性がある（ユーザー影響説）

2：死者AIは、死者の実際の過去をゆがめている。あるいは、私たちが知る死者とは異なる死者像を描き出している（死者の歪曲説）

3：死者AIは、死者の尊厳を侵害している。あるいは、生者の都合にあわせて死者を道具化している（死者の侵害説）

1の議論は、「関係論+現在性」の立場からの死者AI批判であり、死者AIと私たちユーザーとの関係を重視し、そこで生じる（あるいは、将来的に生じうる）心理的影響から死者AIを危惧するタイプの主張である。2の議論は、死者AIが過去の実在した死者像を変容させてしまうこと、私たちが保持する死者に関する記憶の変容を批判するものであり、「存在論+過去性」および「存在論+現在性」の立場からの死者AI批判である。3の議論は、死者本人に（生者に

並ぶような) 権利や尊厳ないし人格性を認め、死者 AI はそれに対する侵害だと考える主張であり、「存在論 + 普遍性」の立場からの死者 AI 批判である。このように、錯綜する死者 AI 批判を、上記の「存在論 / 関係論」「時間性」という枠組みを通して体系的に整理できることが示された。

参考文献

1. 佐藤啓介 「死者の尊厳 の根拠 下からの死者倫理の試み」『宗教哲学研究』36、29-43
2. 佐藤啓介 2022a 「死者倫理の基礎づけを展望する 「下からの死者倫理」の意義と問題点」『グリーンケア』10、45-61
3. 佐藤啓介 2022b 「死者 AI をめぐる倫理のための理論的基盤を考える」『宗教と倫理』22、57-70
4. 佐藤啓介・市川岳・有賀史英 「死者とデジタルに再会する技術 死者 AI の現在とそれがもたらす諸問題を考える」『死生学年報』2023、27-49

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 佐藤啓介, 市川岳, 有賀史英	4. 巻 2023
2. 論文標題 死者とデジタルに再会する技術 - 死者AIの現在とそれがもたらす諸問題を考える	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 死生学年報	6. 最初と最後の頁 27-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 佐藤啓介	4. 巻 11
2. 論文標題 (書評論文) 高橋原・堀江宗正『死者の力: 津波被災地「霊的体験」の死生学』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 グリーンケア	6. 最初と最後の頁 103-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 佐藤啓介	4. 巻 22
2. 論文標題 死者AIをめぐる倫理のための理論的基盤を考える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宗教と倫理	6. 最初と最後の頁 57-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 佐藤啓介	4. 巻 10
2. 論文標題 死者倫理の基礎づけを展望する 「下からの死者倫理」の意義と問題点	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 グリーンケア	6. 最初と最後の頁 45-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤啓介	4. 巻 48(11)
2. 論文標題 キルケゴール『不安の概念』 不安の概念を考えなおす	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 130-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤啓介	4. 巻 58
2. 論文標題 悪しき人間とその尊厳 「神の像」の宗教哲学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本の神学	6. 最初と最後の頁 186-192
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤啓介	4. 巻 36
2. 論文標題 死者の尊厳 の根拠 下からの死者倫理の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宗教哲学研究	6. 最初と最後の頁 29-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤啓介	4. 巻 46(13)
2. 論文標題 考古学者が読んだハイデガー 考古学者はそこに何を発掘したのか?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 194-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤啓介
2. 発表標題 死者AI（故人AI）をめぐる倫理的・法的問題を検討する
3. 学会等名 宗教倫理学会第23回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤啓介
2. 発表標題 死者の存在論と死者の関係論 - 死者倫理の成立可能性 -
3. 学会等名 日本宗教学会第81回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤啓介
2. 発表標題 死者を倫理的に配慮すべき理由 死者の存在論と死者の関係論
3. 学会等名 東洋英和女学院大学死生学研究所 公開連続講座「死生学の拡がり」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤啓介
2. 発表標題 他者論と死者論 死者倫理の宗教哲学的考察
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤啓介
2. 発表標題 死者への敬意の基礎づけは可能か 死者倫理と宗教哲学
3. 学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤啓介
2. 発表標題 悪しき人間とその尊厳 宗教哲学の観点から
3. 学会等名 日本基督教学会第66回学術大会シンポジウム「いま、人間の尊厳を考える」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤啓介
2. 発表標題 宗教哲学は現在どのように語られているのか
3. 学会等名 日本宗教学会第76回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤啓介
2. 発表標題 死者の尊厳 の根拠 二つの死者倫理
3. 学会等名 宗教哲学会第10回学術大会シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 盛永審一郎、松島哲久、小出泰士ほか32名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 338
3. 書名 いまを生きるための倫理学	

1. 著者名 奥田太郎、芝垣亮介、大澤広晃、後藤剛史、佐藤啓介、今井達也、佐々木克巳、宮原佳昭、松川寛紀、松川由実、高田一樹、坂本 登、加地大介	4. 発行年 2017年
2. 出版社 さいはて社	5. 総ページ数 224
3. 書名 失われたドーナツの穴を求めて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------